

空蟬

うつせみ

立原正秋

立原正秋

空 蟬

講談社

空蟬

昭和五十六年十一月二十日 第一刷発行

著 者 立原正秋

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定 価 九八〇円



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© 立原正 一九八一年 Printed in Japan

目 次

空蟬

7

晩夏

43

——
或は
別れの曲

遁走曲

63

春の修羅

97

*

掌の小説

夫婦

149

バスの中

157

奥さん

165

十万円の弁当

173

ネクタイ

181

*

あとがき(武田勝彦)

189

立原正秋作品集

空^{うつ}

蟬^{せみ}

装画 井上公三

(シルクスクリーン petit bois)

空^う

蟬^{せみ}

その日、私は東京で五時から対談があり、三時に家をでた。時間ぎりぎりまで仕事をしていたので、車をよんでもらった。鎌倉駅まで車で十分ほどの距離である。トンネルをふたつ抜けると右側に市役所があり、まもなく鎌倉駅の裏側にでられる。この道は時間によって車が混んだが、この日はふたつ目のトンネルを抜けたところで道路工事をしており、そのため片側通行になり、かなり待たされた。

私は苺をつけ、工事を行っている道路の方をみた。工事は進行方向の右側でやっていた。

「夜中に工事をやればいいのに」

と若い運転手が言った。

「そうもいかないだろう」

と私は応じながら、おや、と工事現場の一人の男に目をとめた。あれは安^{やす}じゃないか、と私は呟いた。車から工事現場までの距離は十メートルはあった。私は右側の席に移り窓をあけてみた。まちがいなく市川安男だった。ミキサー車から一輪車にコンクリートを受けて運んでいる横顔がはつきりみえた。

「ここでおきるよ」

「そうですか。混んでいて申訳ないです」

「いや、あなたの責任ではない」

私は車からおりと工事現場に歩いた。

現場についたとき、安は一輪車を押しているところだった。

「おい、安じゃないか」

すると安はびっくりしてこっちをみたが、一輪車を押してコンクリートを埋める現場に行ってしまった。そしてそこにコンクリートをおろすと一輪車を押して戻ってきた

た。灰色の作業衣に地下足袋をつけ無帽だった。

「おい、俺だよ」

「あんた、誰だい」

安はこつちを睨んだ。

「しばらく会わないからといって顔を忘れたわけではあるまい。国東くにぎもとだよ」

私は駄駄っ子に語りかけるように話した。

「知らんね。俺は安じゃないよ。気やすく話しかけないでくれ」

「それなら、さっき俺が安とよんだとき何故俺をみたんだ」

「そばからいきなり声がしたら誰だってびっくりするよ。仕事の邪魔をしないでもらいたいね」

それから安はミキサ車のコンクリート流し口に一輪車をつけた。私はしばらく安の動作を視ていた。本人が拒む以上は語りかけようがなかった。私は安が拒んでいるわけをどこかで感じはじめていた。やがて一輪車にコンクリートがいっぱいになり、

安がそれを押して動きだそうとしたとき、

「馬鹿野郎、ながいあいだつきあってきて、そんな挨拶はないだろう。おぼえておれ」

と私はまわりで作業をしている人達にきこえないように小声で安に罵声を浴びせて現場を離れた。駅前でレストランをやっている大池に応援をたのむほかなかった。私は市役所の庭に沿った歩道をいそぎ足になった。そして途中で工事現場を振りかえったら、安がこっちを視ていた。私が手をあげてふったら、安は目を逸らして一輪車を押し後姿を見せて去った。なんて野郎だ、と私は呟いて歩きだした。このときが、私が安を視た最後だった。大池をつれて現場に戻ったとき、安はもうそこにいなかった。

ミキサー車の運転台の扉に三輪建設と書いてあり、なんだ、三輪のところか、と大池が言った。

「知っているのか」

「商工会議所の仲間で、県議員だ。おまえは政治家を嫌っているが、案外いい奴なんだ」

それから大池は現場主任をつかまえ、市川のことをきいた。

「ああ、あの臨時雇か。腹が痛くなつたと言って帰りましたよ」

現場主任は五十年輩の男だった。

「住所を御存知でしょうか」

と私はきいた。

「さあ。事務所に行けばわかるが」

大池と私は主任に礼を述べて現場から離れた。

「おまえ、これから東京だろう。三輪の事務所に電話して俺がしらべておくよ」

路上に二月末のおそい午後の陽がさしていた。車が跡絶えるのを見はからって私達は車道を横切って向うがわに渡り、テニスコート沿いの歩道を駅に向った。どこからか梅が匂ってきたが、安のあの人なつこい顔はもうみえなかった。

「あんだ、誰だい」

と言って私を睨んだ安を思いかえして、私はすこし苦しくなってきた。安を道路工事人夫にまで追いつめてしまったものがなんであるか、私には解らなかったが、安はまちがいなく私達の友であった。

裏駅の前で大池と別れた。

乗車券をもとめて改札口に歩いていったとき、国東、とうしろから大池に呼びとめられた。

「なんだ、まだそこにいたのか」

「酒をすこしひかえろ」

そして大池はくるっとこちに背をみせて歩き去った。黒い皮ジャンパーの背中が表駅に通じる地下道に向っていた。わかったよ、と私は呟いて改札口をはいった。

上りの電車がつくまで七分あったので、私はホームの公衆電話から出版社に電話をし、四十分ほど遅れる、と知らせた。